

甕型厨子における近世紀年銘資料

吉田健太

1. はじめに

那覇市立壺屋焼物博物館は、平成 25 年 3 月に門上秀叡・千恵子両氏が収集した厨子（蔵骨器）および沖縄関連資料 4830 点を収蔵した。今後、このコレクションを旧所蔵者の名前を冠し「門上秀叡・千恵子コレクション」として、那覇市立壺屋焼物博物館において保管・研究および展示公開し、活用していく予定である。購入、資料の運搬、修復、および 2014 年 11 月から開催される特別展については、沖縄振興特別推進交付金（壺屋の歴史・文化発信事業）が活用された。18 世紀の年号が入った蔵骨器「壘」は那覇市指定文化財に指定されているなど、多岐にわたる厨子の世界を表現しうるものである。資料の整理に際して、コレクションの中には紀年銘が記載されているものが多く含まれていることが確認された。本稿では、その中でも銘書が確認された甕型厨子に焦点を当て、当資料の紹介および検討をおこなうものである。

2. 厨子の概要

厨子は、沖縄における蔵骨器の総称である。本来、厨子は「仏像・経巻を安置する両とびらの箱。単に書物や食物などをたくわえる箱」である。しかし少なくとも乾隆元年(1736)には厨子の名が「四本堂家札」に使用されていることから、この頃には厨子の名称が使用されていたと考えられる（浦添市教育委員会 1985）。琉球では人の遺骨を再葬して墓に埋納する習慣があり、厨子の分布は、奄美の島々から先島に至るまで、琉球諸島全域に及んでいると考えられている。ただし使用方法については地域差が認められる。沖縄内であっても階層などで差異をつけることがある。支配層の間では、家を中心とする個別墓が発達し、厨子を個人または夫婦単位で使用することが一般的であった。

厨子が研究対象もしくは報告されるのは早く、1888 年に西表島を訪れた田代安定が骨を納める壺があると紹介したことにはじまる。ただし、以降は陶芸品や民具としての扱が多く、考古学的調査は行われなかった。それは、厨子自体が現在を生きる人々の祖先に深く関わるものであり敬遠されがちであり、またどのような文化財的価値があるのかということが考えにくかったため、というのが背景として考えられる。本格的な調査がおこなわれたのは、浦添ようどれにおける調査がはじまりである。これは 1955～56 年におこなわれた浦添ようどれ整備に伴う調査であり、調査の一環として収められた石製厨子の調査が行われている。調査の結果から、調査対象の厨子の製作工程を検証しているが、厨

よしだ けんた（那覇市立壺屋焼物博物館学芸員）

子の報告については美術史的な記述が主であった（琉球政府文化財保護委員会 1957）。以後、1980年代になると、沖縄県内における発掘調査件数が増加し、それにあわせて古墓を対象とした発掘調査も実施されることとなる。那覇市のヒヤジョー毛古墓群、銘苅古墓群、真嘉比・古島古墓群、ナーチュ毛古墓群、浦添市の前田・経塚近世墓群、伊祖の入め御拝領墓、久米島町（旧具志川村）ヤッチのガマ・カンジン原古墓群、与那国町嘉田地区古墓群、など数多くの古墓群が調査され、大量の厨子が検出された。

そのような中で、厨子における分類・編年の先駆けであったのが、名嘉真宜勝氏、上江洲均氏である（名嘉真 1978, 上江洲 1980）。特に上江洲均氏は、厨子を「素材・材質による分類」「器種や釉薬による分類」をおこなっている。そして器種ごと普及した時期の上限・下限の範囲を厨子に記された銘書との照合を基本として設定し、厨子の時期的な変遷を提示している。上江洲氏のつくった編年モデルは以後の厨子の編年研究の基礎となっており、また現時点における厨子の編年の基準となっていることより、本稿でもこれを基準として、厨子の年代を示す（表 1）。

表 1 で示されているように、厨子の上限年代は、1500 年前後あたりと考えられている。1500 年前後までは、中国福建省産の輝緑岩製の石厨子や漆塗りの板厨子が用いられていた。ただ広く普及するのは 1700 年代以降と考えられる。木製の厨子を用いていたものが、次

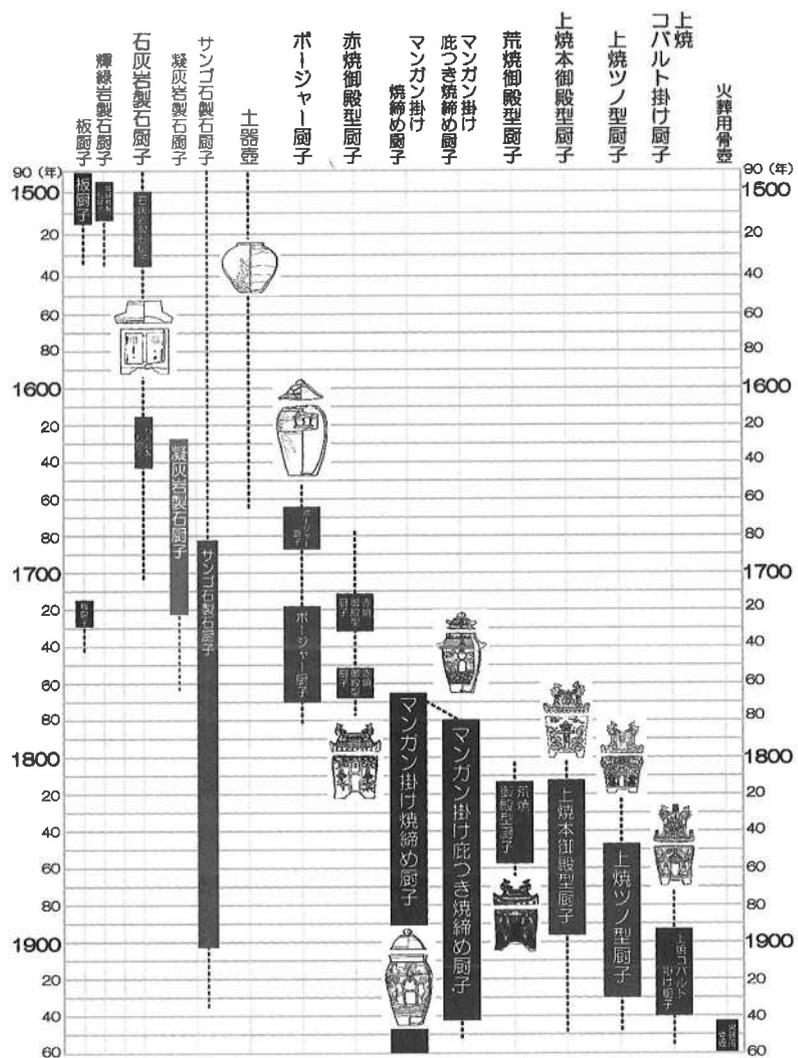


表 1 厨子の編年（那覇市立壺屋焼物博物館 2005 より一部加筆・修正）

第に腐食せず、耐久性の強い素材のものへと変化したと考えられており、陶器製のもののほか、珊瑚石灰岩や閃緑岩、凝灰岩などの石製のものがある。その後、1670年ごろまでの間をつなぐ骨壺の種類としては、本来は他の用途のために作ったのであろう土器壺や外来品を当てていたと考えられる。以後は素焼き壺の後を受ける形で、甕型のボージャー厨子が登場し、それよりややおくれて赤焼御殿型厨子が作られ、上焼本御殿型厨子へと移っていく。その間も石製は引続き作り用いられている。以下、各陶製厨子の詳細を記述していく。

ボージャー厨子は、上限を康熙9年（1670年）とする古いタイプの陶製甕型厨子である。形状は、口縁が丸縁で、胴部には入口の庇がはっきりつけられ、庇の屋根は板葺き状になっている。全体に薄手で泥釉をかけたような窯変が一部に認められ、ふたは笠状の蓋で、頂上には宝珠のつまみがあり、屋根には唐草文の釘彫りがほどこしてある。胴部には、横から背後にかけて、蓮華の線彫りがなされている。ボージャー厨子と一括りにはしているが、その中でも時期的に2タイプに分けられる。前者の系統は1670年～1720年ぐらいまでのもので、上記した古いタイプのものである。後者の系統は、雍正10年（1732）を初めとして、1790年ごろまでであるもので、特に1730年代から70年ごろまでに集中しているものである。赤っぽい甕型が多くなり、全体的に厚ぼったく、胴部には線彫りがほとんどない。このタイプは、乾隆年間の一大特色をあらわす形状である。後者の系統の時期は赤焼の御殿型とも時期的にはつながる。古い墓にはかなり見られるもので、「四本堂家礼」に出る厨子というのも時代的にみて、このボージャー厨子といえる。（上江洲 1980）。なおボージャー厨子については金武正紀氏や西銘章氏により詳しい検討がなされている、（金武 2005, 西銘 2003, 2004）

マンガン掛け焼締め厨子は、ボージャー厨子がしだいに少なくなる1770年代に、取っかわるように出てくるものである。全面にマンガンを掛けた黒っぽい焼締めの陶製厨子である。水甕を細くした形づくり、正面の胴部には瓦屋根をかたどったものを張り付けている。このマンガン掛け焼締め厨子は、陶製厨子の数あるタイプの中で最も多く、庶民向けのものであると考えられる。戦後までつくられるが、だんだん口が大きく細型になり、張りつけと線彫りを適当に混ぜたものが多くなる。

マンガン掛け庇つき焼締め厨子は、マンガン掛け焼締め厨子より少し遅れて出現するとされる。19世紀中期に型の上で完成し、昭和10年代までつくられる。特徴としては、胴部に瓦屋根の庇をつけた張りつけである。また、胴部に蓮華や法師像や普通の花をつけ、蓋や庇には龍を正面に置き、獅子頭を四方に配し、小さな丸玉を張り付けるなどしている。

続いて、形状は御殿型（家型）にうつっていくとされる。18世紀前半に登場し、初期のものは赤焼である。発生的には石厨子から家型を陶土におきかえた様相を呈する。赤焼のものは、初期のころの屋根は入母屋であるが、後に寄棟になる。乾隆年間の1770年代に集中する。文様の特徴としては、全面に石灰塗装を行っており、その上に朱と墨による蓮華を描いている。屋根の部分には、シャチホコをつけており、シャチホコの下には獅子

頭の鬼瓦をつけている。

荒焼御殿型厨子は、赤焼の少し後の19世紀前半から中期ごろまでに集中している御殿型厨子である。形は赤焼御殿型厨子の後を引くが、焼締め方としてはマンガン掛けの甕型と同じ系統を持つ。屋根のシャチホコも、赤焼のものとは比べ、大きく形も整ってくる。屋根は単層だけでなく2層になったものが多く、入母屋の変形もしくは切妻型とされている。

上焼本御殿型厨子は、上記した荒焼御殿型厨子とほぼ同時期である、19世紀前半から19世紀後半頃に集中してみられる厨子である。特徴としては、飴釉、緑釉、呉須といった多種の釉薬を用いた色鮮やかな装飾である。また、シャチホコ、獅子、龍を屋根に配しているものが多い。

以上のような本御殿型に対し、一般普及型であったといえるのが上焼ツノ型厨子である。俗にソーベールとも言う。19世紀中頃から昭和初年頃まで多く作られていた。多種の釉薬を用いていることから色調は美しい。形の特徴としては、屋根の上層部がかなり高くなっており、屋根の各部にはツノ状の突起を有している。このツノは、その上に皿や碗等の他の雑器をのせて焼くための台ともなっている。これは焼き上げる際に窯内のスペースを効率よく使用するための知恵である。

最後に明治以降に輸入されるようになった西洋コバルトを全面にかけた上焼コバルト掛け厨子がある。明治34,5年頃から戦後まで普及し、特に大正年間に多く用いられたと考えられる。色調は色鮮やかな青が主体となっており、飴釉を部分的に用いるものも見られる。形の特徴としては、屋根の上層部が高くなっており、上焼ツノ型厨子と似ている。ツノはなく、シャチホコ・獅子・龍頭などの張り付け装飾が多く見られる。なおボージャー厨子以降のものにおいては、安里進氏により、装飾による編年および銘書による墓内の家族史の研究というものが詳しくなされており（安里1997, 2003, 2006）、現在浦添市で調査されている前田・経塚近世古墓群において研究がすすめられている。

以上のように、器形や文様に着目して、厨子のそれぞれのタイプの研究はすすめられている。しかし、それを実年代にあてはめることは困難な作業となる。厨子のほとんどが墓の中にあることから、考古学の根幹となる層位からの年代判断ができないというのがある。そこで厨子編年と実年代をすりあわせるのに重要になるのが、厨子に書かれる銘書である。銘書とは、蔵骨器に記された墓誌銘を指す方言である。その主な記載内容としては、被葬者の姓名、位階、死亡・洗骨年月日などが挙げられる。銘書は基本的には墨書で記され、蔵骨器の蓋と身に記されることが多い。また身の屋門内や口唇部に記されるものもある（鈴木2014）。これにより、被葬者の身分を判別することが可能となる。また銘書が基準となり、厨子編年と銘書年代とあわせることにより、考古学の分類ははじめて歴史の中で意味を持つてくる。「門上秀叡・千恵子コレクション」には年号を含む銘書が記されている厨子が数多く所在する。今回はその中でも甕型厨子に着目していく。

3. 紀年銘入厨子の概要

本稿で紹介するのは、総計 23 点の紀年銘入り厨子である。1 点ごとの計測数値および銘書に記された年号・銘書を記録し、記録し、各厨子の実測をおこなった(表 2・表 3)。

厨子 1 は六角形の形状を有した脚付厨子である。色調は蓋、身ともに赤色が強い。若干身の方が強い印象を受ける。蓋は側面および頭頂部が欠けている。上から見ると、蓋の形状は六角形となっている。貼り付けの帯で分割されているが、蓋の全面にわたり一本の唐草文が貼付けで装飾されている。裏面には銘書が墨書きされている。身は数カ所欠けており、ヒビまた接合跡が多数確認できる。六角形の形状の庇が付いている。庇の各隅には鳥の頭部をかたどった装飾が確認できる。その下に文様帯が確認できる。正面と思われる屋門部分は欠如しているため確認する事はできないが、花瓶らしき貼り付けの装飾は確認できる。また正面下部には花卉が貼り付けで装飾されている。胴部周囲には法師像、蓮華が貼り付けで装飾されている。法師像は無釉のものと、マンガン釉で施釉されたものの 2 種類ある。胴下部文様帯には唐草文が線彫りされている。底部には脚が六脚ついている。

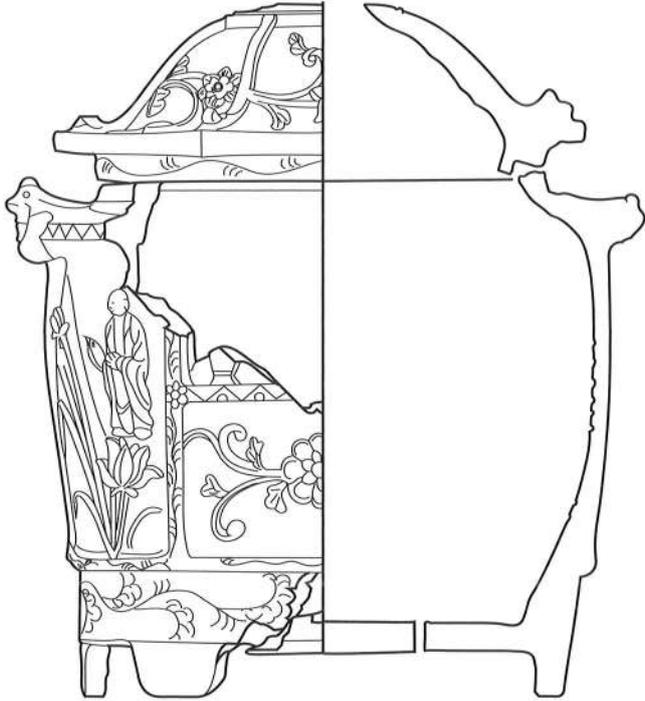
厨子 2 はボージャー厨子である。蓋、身ともに表面は黒くボテツとした釉薬で施釉されている。内側は無釉である。蓋頭頂部には擬宝珠がついており、周囲には簡易な唐草文が線彫りされている。内側には銘書が墨書きされている。蓋は身の口縁部の外側にかぶさるような形状となっている。身はボージャー厨子の形状を持つ。焼き締めは強く、かなり重い。口縁部は若干たつ傾向が見られ、前期ボージャー厨子の様相が見える。上部には釉剥ぎが長方形の数カ所見られる。マド枠は平葺形の 1 方 4 円である。

表 2 厨子観察一覧表

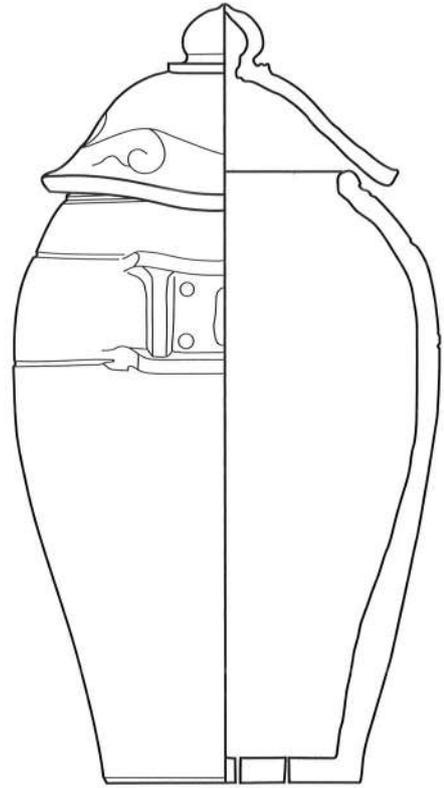
整理番号	図版番号	種類	蓋 (cm)		身 (cm)				死去年	洗骨年	備考
			高さ	口径	高さ	口径	胴径	底径			
189	厨子1	甕型	15.5	37.5*43.1	43.4	35.6	44.3	37.5		1715年	
92	厨子2	甕型	15.7	29	51.3	24	34.7	20.7		1724年	
4	厨子3	甕型	—	—	52	25	41.4	21	1714年/1718年	1727年	
壺	厨子4	甕型	17	33.8	49.6	29.4	42	25.2	1667年/1660年		改納1727年
7	厨子5	甕型	14	29.8	60	33	45	23.5		1732年	
186	厨子6	甕型	—	—	41.9	22.9	34.8	17.9	1732年?	1732年?	
11	厨子7	甕型	14	38*41.5	53	31	44.5	28		1735年	
37	厨子8	甕型	0	0	47.1	24.8	33.2	18.7		1737年	
67	厨子9	甕型	13.3	31.4	53.3	27.7	37.7	28	1737年?/1742	1737年?/1742年?	
14	厨子10	甕型	—	—	60.5	30.4	45.3	29.8	1753年	1754年	
44	厨子11	甕型	—	—	48	27.5	32.7	21.7		1775年	
25	厨子12	甕型	19.5	33	54.5	32	44.6	22.6		1778年	
66	厨子13	甕型	0	0	49.2	30.3	34.3	21.8	1782年	1782年?	
K-8	厨子14	甕型	10.5	26.5	57	27.5	40.5	25	1790年?	1790年?	
185	厨子15	甕型	15.7	30	48.8	27	37	20	乾隆年間		
178	厨子16	甕型	18.2	33.8	67.5	34.2	48.3	26.4	1798年?	1798年?	
53	厨子17	甕型	17	31.5	57	30	37.1	23.5	1801年	1801年	
18	厨子18	甕型	17	29.9	51	29	39.7	24.6		1813年/1816年	
K-4	厨子19	甕型	16	26	53.5	28.2	38.7	25	同治年間?	同治年間	
188	厨子20	甕型	16	28.8	52.3	28	33.5	21	1893年	1900年	
180	厨子21	甕型	14.5	33.2	67	34	48.3	23.5	1903年		
56	厨子22	甕型	—	—	49.5	27.3	34.2	21.4	明治40年代?	明治40年代?	
K-7	厨子23	甕型	14.5	33.5	52.5	26.2	29	19.4	1932年	1944年	

0 30cm

S=1/6



厨子 1



厨子 2



厨子 3



厨子 4

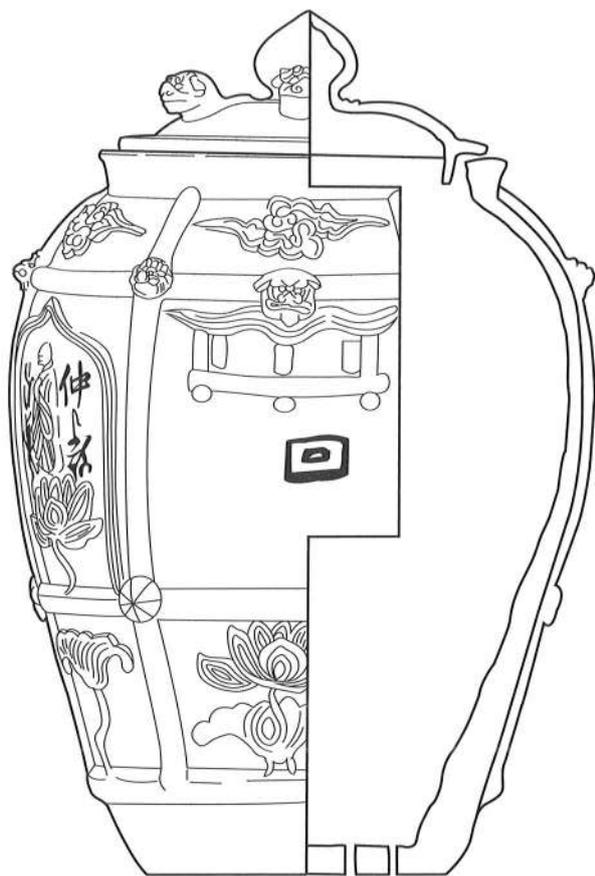
厨子3はボージャー厨子である。蓋はなく、身のみである。表面を見ると、焼き締めが強く、またかなり重たい。口縁部は内側に向かって丸みを帯びており、口唇部には数カ所の欠けが確認できる。肩部には唐草文の装飾が全体に装飾されている。また小さいものの、作者と思われる印が押されている。胴部は貼付けられた帯により6分割されている。正面には銘書が線彫りで施されている。書体は達筆の印象を持つ。他5面には蓮華が一つずつ線彫りで描かれている。

厨子4はボージャー厨子に類似する。蓋、身ともに釉薬は施されていないが、焼き締めが強く、重たい。厨子3と類似する。蓋は頭頂部に擬宝珠が確認できる。その擬宝珠を中心として5本の帯が見受けられ、その端には装飾が施されている。帯と帯の間には蓮華文が線彫りで施されている。身の口縁部は内側に湾曲しており、丸みが見られる。口唇部には長方形の跡が数カ所確認できる。身の正面には銘書が線彫りされている。書体はいずれも達筆である。また肩部周囲には貼り付けの唐草文で装飾されており、華・葉・唐草いずれも精巧な作りが見られる。なお当厨子は、那覇市指定文化財として登録されている。

厨子5はかなり大きめの厨子である。蓋は擬宝珠が付いており、六方向に獅子の頭部を模した彫刻がついている。蓋の裏側に銘書が墨書きされている。蓋をかぶせると、若干身の口縁部がはみ出るものの、口縁部内側に収まる形状をしている。身は施釉されていない。胴部の張りが強い甕型の形状をなしているものの、口縁部や装飾部分はマンガン掛け焼締め厨子の特徴を持っている。口縁部は直行に角を作る形状をしており、蓋と接する面は平坦に形成されている。肩部・胴部・胴下部は6面の装飾が形成されている。肩部装飾帯には6面全てに雲形を型取りした装飾が貼付けてある。いずれも同じ装飾と考えられる。同部装飾帯には正面にはマド枠の唐破風形が形成されている。孔は3つである。その上に獅子の頭部を象ったものがなされている。マド枠の下には墨書で「回」と記されている。他の5面にはいずれも位牌形の屋門が施され、屋門内に蓮華文にのった法師像の装飾が施されている。位牌・法師像・蓮華いずれも貼り付けである。胴下部装飾帯には蓮華文の装飾が貼付けで表現されている。正面のみ蓮華文の下部に葉が表現されており、他の5面は蓮華のみの表現にとどまっている。底部には孔が複数空けている。

厨子6は壺形の厨子である。蓋はなく、身のみである。表面は黒釉で厚く施釉されているが、均等に塗られているのではなく、底部周辺には流し掛けした痕跡が随所に見られる。また正面には銘書が線彫りされている。銘書が施されている部分の裏側が釉薬のムラが多く見られる。口縁部は直口型であり、口唇部は平坦に形成されている。なお口縁および口唇部には釉薬は施されていない。内面は施釉されていないが、数カ所黒釉が垂れた跡が見受けられる。内面の色調は、暗い赤色である。

厨子7はボージャー厨子である。蓋、身ともに無釉陶器である。全体的に焼き締まっており、重たい。蓋は頭頂部に小さな擬宝珠を有している。また上から見ると六角形の形状を有しており、各角には鳥の頭部の形状の装飾が施してある。身は胴部が張る形状を有している。口縁部は少し内湾している。また口唇部の厚みは若干ある。正面には寄棟形のマ

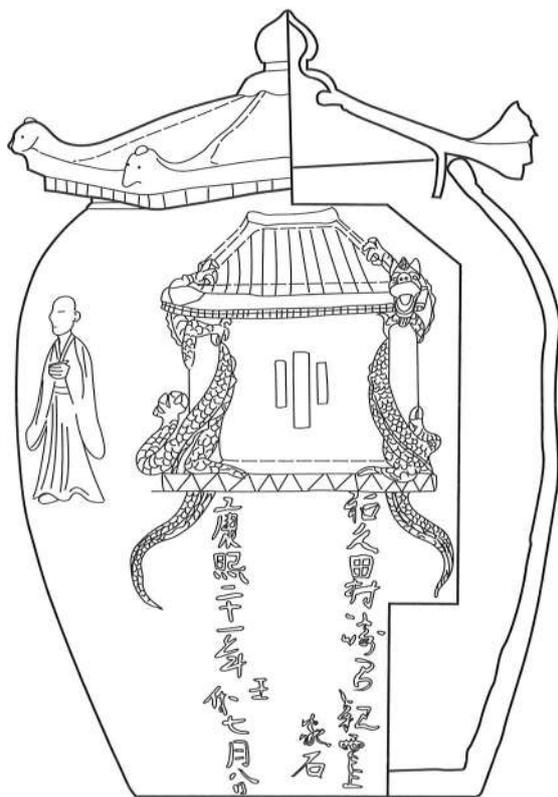


厨子 5

0 30cm
S=1/6



厨子 6



厨子 7



厨子 8

ド枠が見受けられる。孔は3つ方形で空けてある。またマド枠両脇には龍が巻かれる装飾が施されている。またマド枠下部には銘書が線彫りされている。また胴部周囲には法師像の装飾が貼付けられており、計6体が確認できる。法師像はそれぞれ持っているものが異なる。

厨子8はボージャー厨子である。蓋はなく、身のみである。重みがあり、色調も赤よりも灰色が強く見られる事から、焼き締めは強いものと考えられる。口縁部は丸みがあり、肥厚を感じさせる。2カ所に黒色の釉薬が付着されているのが確認できる。剥離している面も見られ、重ね焼きをしていた跡が確認できる。ボージャー厨子でも前期に位置するものと考えられる。底部には径2mmほどの孔が10箇所空けてある。正面にはマド枠が設置され、孔は3つ確認できる。平葺形1方2方である。蓮弁文は、窓に向かって右側と窓の下面の計2つ確認できる。前者は大きく、後者は小さい。どちらも線彫りであるが、後者の蓮弁は前者と比べて線彫りの深さが若干深い印象を受ける。蓮文は2つとも簡易的なものであり、花のみが描かれそれ以外の装飾は少ない。また背面には窯印らしきものと、不明の文様が線彫りされている。銘書はマド枠下に墨書されている。

厨子9は脚付厨子である。蓋、身ともに釉薬は施されていない。蓋と身では色調が異なる。蓋の焼き締めが強い印象を受ける。蓋の頭頂部には擬宝珠が付いている。表面には特に装飾などは確認できない。裏面には銘書が墨書きされている。身は、肩から底部にかけて大きく径が変わらない形状を有している。口縁部は直口しており、口唇部は若干の丸みを確認できる。肩部文様帯には唐草文が全面に線彫りされている。胴部文様帯には正面には銘書が線彫りで施されている。書体は達筆である。その銘書上には3つ孔が空けられており、それを枠で囲む装飾がなされている。両側面には花が挿された瓶が貼り付けで表現されている。そして蓮に載った仏像が2体ずつ貼り付けで装飾されている。描写はかなり細かい。裏面には植物の文様が貼り付けで装飾されている。胴下部には全面に蓮華文が所狭しと貼付けられている。底部には幅の広い脚が3つ確認できる。

厨子10は脚付厨子である。蓋はなく、身のみである。色調は全体的に赤色が強い。胴下部は少し黒色が混じる。胴部が張る壺型の形状をなしているが、底部において脚が7つ確認できる。口縁部は外縁がつく形状をなしている。上部はやや内面に向けて落ち込むような形状をしている。胴部は帯が貼付けられ、正面、両側面、背面の4面に分けられる。正面にはマド枠が寄棟形となっており、孔は3つ開いている。屋根は突き出す形をしているものの、瓦などの表現は見られない。その他3面には帯で囲まれているのみで、目立った装飾などは確認できない。マド枠に向かって右側に線彫りで銘書が施されている。字体は達筆の印象を受ける。

厨子11はボージャータイプの厨子である。蓋はなく、身のみである。釉薬が施されていない無釉陶器である。全体的な色調は、暗赤色である。口縁部は直口で立っており、口唇部は平坦に形成されている。正面にはマド枠が確認でき、平葺形の1方2円の形状をなしている。マド枠の両側面には法師像が貼り付けで装飾されている。また文様の印が押さ